装撃のデュナミス

五百川 光

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
装撃のデュナミス

【Ｎコード】
Ｎ９０５２Ｖ

【作者名】
五百川　光

【あらすじ】
この世界には人間以外に、異形の魔物たちが生息している。その魔物たちは時に人を襲い、甚大な被害をもたらしていた…。だが世界にはそんな魔物に対抗するため、特殊な力を持った人間たちが存在する…。それは魔装具（まそうぐ）という特殊能力を秘めた装備品を使って戦う者たち―。その者たちの名を？デュナミス？という―。これは一人前のデュナミスを目指す者たちの物語である―。

#0-1（前書き）

この物語はフィクションです。物語の舞台は現実世界に似ている世界というだけであって、実在する団体、組織、名称などとは一切関係ありません。

#0-1

カーテンの隙間から、暖かい光が差し込んでいる。
外からは小鳥のさえずりが聞こえ、なんとも気持ちの良い朝を感じさせている。

「う～ん、ん？朝か…」

ベッドの中でモゾモゾしながら、一人の少年がゆっくりと体を起こす。

彼の名前は日立　勇気（ひだち　ゆうき）―。

勇気は大きな欠伸をしながら、横に置いていた携帯を開き、時間を確認する。

「ふ～。さて、今何時だ？」

そう言いながら、携帯の液晶に視線を落とした。現在の時間は８時１２分―。
その時間をまじまじと見ながら、まだハッキリしない頭をフル回転させて、今の自分の状況を考えてみる。

「えっと…。確か今日は、何か大切なことがあったような気が…」

そして部屋に掛けてあるカレンダーへと視線をおくった。
その瞬間、脳裏にある行事が浮かんだ―。

「あれ？今日って、入学式じゃね？」

一つの結論を導きだした勇気は、悲鳴を上げながらベッドから飛び起きた―。

#0-1（後書き）

作者の表現力がほぼ無いに等しいので、読みづらかったりすると思いますが、自分なりに頑張っていこうと思います！
誤字、脱字などは見つけしだい修正していきます。
更新する時間帯ゆえに、一定量を書いて投稿することが多くなると思います。少しずつ書いて一つのページを仕上げるという書き方をしているので、一話を読み終わった後、しばらくして続話を読むと話が飛んでたりなどがあると思います。それだけご注意ください…。
亀更新になると思いますが、これからよろしくお願いします！

#0-2

「ぬお～！ヤバい！遅刻する～！！」

勇気は街の中を全力疾走していた。
今の時間は８時２５分―。
入学式が始まるまでには、まだ時間があるのだが、新入生はまず自分のクラスで出席をとることになっている。当然ながらクラスは入学式当日に貼り出されるため、自分のクラスを確認しなければならない。
そのため時間に余裕を持って学園に向かうはずだったのだが、昨日の夜は緊張してしまい寝つけなかった。

「あ～！こんな大切な日に遅刻なんて！アホか、俺は～！！」

今はとにかく走るしかないと、自分に言い聞かせ走り続ける。
すると勇気の横を一台のバスが通り過ぎていく。
そのバスを見て、勇気は目を疑った―。

「あ・・・・・・・」

そのバスの行き先は『神月学園正門前』―。

そう…今、勇気が全力で向かっている場所だ。
その光景を見て、目が点になる。

「Ｎｏーーーーー！！忘れてた！走らなくても、バスっていう移動手段があったんじゃねぇか！何やってんだ、俺は！」

遅刻してしまうということばかりに気をとられて、冷静な判断ができなかったことに勇気は後悔する。
バスに乗ってたらギリギリ間に合ったかもしれないのだが、今となってはどうしようもない。
勇気は自分のミスを悔やみながら、燃え尽きる覚悟で学園への道を疾走するのだった―。

#0-3

勇気が街中を学園へ向けて、爆走しているころ…。

「う～ん・・勇気のヤツおせぇな～。もう登校してなきゃいけねぇ時間なのに、いったい何やってんだ？」

神月学園の正門前で腕時計を見ながら、左右を見回している少年が一人。
彼の名前は坂城　匠（さかき　たくみ）。勇気の親友で、彼も今日からこの学園の生徒になる。
髪の色は水色。身長はそれほど高くなく、本人はそのことにコンプレックスを抱いている（らしい）…。

「どうだ？勇気は来たか？」

そしてもう一人、黒の短髪に黒縁のメガネを掛けた少年が匠のほうへと歩みよってくる。
穂刈　純一郎（ほかり　じゅんいちろう）。見た目は恐そうだが、性格は優しく、周りの者たちからは純（じゅん）と呼ばれている。
彼もまた勇気の親友の一人である。

「いや、まだ影も形も見えません…」

「そうか…。何かあったのかもな…」

「どうせ、遅刻かなんかだろ～。昨日、緊張しすぎて寝れなかったんだぜ、きっと！」

「さすがにそれは無いだろ…」

純は苦笑しながら辺りを見渡す。
そこには自分たちと同じく、今日から神月学園の生徒になる者たちの姿があった。
中には緊張している者や友達と談笑しながらの者など、十人十色である。

「…にしても、けっこうな数の新入生がいるんだな。これほどの数がいるとは思わなかった」

「まあ俺たちの通う所だけじゃないからな～。入学式だし、全科合同でやるのが普通だろうしな～、ん？あれは…」

そんなことを二人で話しているときだった。匠がある人物を見つけた。

「ふぅ～、やっと来たみたいだぜ！」

匠は振り向いて、その人物のほうを指さした。

純もそれに気づいて、やれやれといった感じでそちらを向く。

「わりぃ～！待たせた～！！」

そこには大きく手を振りながら、荒い息で走ってくる勇気の姿があった。

「ったく、どんだけ待たせるのかね～。あいつは…」

「まあ、いいんじゃないか？遅刻しなかったようだし…」

匠と純は顔を見合わせ、そう言いながら勇気と合流した。

◇◆◇◆◇◆◇

勇気はなんとか間に合ったことに、ホッと胸を撫で下ろした。

「そんで？妙に遅かったけど、なんかあったんか？」

匠はニヤニヤしながら、遅くなった理由を尋ねる。
勇気は苦笑しながら、ナイスな言い訳を考える。さすがに『緊張して眠れなかった』とは言いづらい…。

「えっとだな～…。そう！実は来る途中にお年寄りの方が困ってたんだよ～！それに迷子なんかもいてな～！いや～、困った困った！！」

我ながら苦しい言い訳である。勇気は空を見上げながら様子をうかがう。
もちろんそんなことは信じてもらえず、匠はさらにニヤニヤした。

「そうかそうか、緊張して眠れなかったか…。仕方ないな…」

「ぐっ・・・」

見当がついていながら言わせるとは酷いヤツである。

「匠、あんまり勇気をいじめるなよ…」

純は笑いながら匠を制止した。ハイハイと匠は前を向き、校舎のほうを向く。

「お！あそこが玄関口らしいな～！」

匠の発言に二人も前を見やる。

「今日からここで生活するんだな～」

純はそう言って、校舎を見上げた。

「ああ、いよいよ始まる新しい生活。さて、どうなることやら…」

そして勇気も空を見上げながら拳を握りしめ、これから起こるであろう数々の出会いや出来事に思いを馳せるのであった―。

#1-1

「ふあ～、なんとか入学式が終わったな～」

匠は大きく伸びをしながら廊下を歩いていた。
先ほど入学式が終了し、新入生は各々、自分たちの教室へと向かっている。

「それにしても俺たち三人とも同じクラスでよかったな。バラバラになったらどうしようかと思ってたよ…」

純は安心したような顔をして、ホッと息をついた。

「そうだな、周りが知らない人ばかりだとソワソワしちまうところだった…。知った顔がいるのといないのとでは全然違うからな～」

勇気も苦笑しながら教室へと進む。確かに初対面の者ばかりだと、いろいろ考えてしまい、妙に緊張してしまう。

「だけどこれから長い間、一緒に生活していくクラスメートになるわけだし、早いうちに慣れておいたほうがいいだろうな。特に俺たちが入学した学科の場合は学校だけじゃなく、日常のほうでも頻繁に顔を合わせることになる。だから普通に話せるくらいにはならな

いと…」

純はこれからのことを考えながら言った。勇気と匠は静かにうなずく。

普通の学科なら時間を掛けれるのだが、勇気たちが通う学科となれば話は変わる…。

そうこう話している間に教室へと着いた。

（そうだな…。純が言ってることは正しい。俺も早いとこクラスに馴染まないとな～）

勇気はそんなことを思いながら一息つき、教室へと足を踏み入れた。

◇◆◇◆◇◆◇

勇気たちは教室に入り、自分たちの席へとついた。初めの席順は当然ながら出席番号の順番で座ることになる。

同じクラスとはいえ二人とは席が離れているので、勇気の周りは初対面の者ばかりだ。

（さて…どうしようかね～。適当に話しかけてみるか？いや、だけどいきなり話しかけて警戒されたらな～…。さすがに出だしでそれは避けたい…）

そんなふうに唸っていると、席の後ろから声がした。

「なんか唸ってるみたいだけど、どうかしたのかい？」

「え？」

勇気は声のしたほうへと振り向いた。
そこには青色の瞳と髪に、整った綺麗な顔立ちをした誰が見ても美少年と言えるであろう生徒がこちらを見ている。

「あ…えっと…その…」

勇気は言葉に詰まり、話しかけてきた生徒を見る。

「ん？僕の顔に何か付いてるかい？」

「え…あ、いやなんでもないよ。気にしないでくれ」

「そうかい？ならいいんだけど…」

別に何かが付いてたわけではない。いきなり話しかけられてビックリしたというのもあるのだが、何よりこの生徒の容姿に目を引かれてしまった。

「それでさっきは何か考え事でもしてたのかい？」

「えっ、ああちょっとな。くだらない考え事だよ。別に気にしないでくれ」

勇気は苦笑しながら言った。
だがこのクラスで初めて話しかけられたのだ。このチャンスを逃さない手はないと、勇気は生徒のほうへと体を向けた。

「俺の名前は日立　勇気。よろしくな！」

勇気は出来るだけ明るくいこうと、いつもより大きめの声で名を名乗る。

「日立君か。僕は二神　伊吹（ふたがみ　いぶき）。これからよろしくね」

少年は笑みを浮かべながら手を伸ばしてきた。その様子を見て、勇気も手を伸ばし、互いに握手をする。
このクラスでの初めての友達だ。
これで少しは楽しい学校生活になるんじゃないだろうかと勇気はホッとする。
そこに匠と純もやってきて、軽く自己紹介をした。三人も早くに打ち解けることができたようだ。
そうこうしているうちに教室のドアが開き、担任である竹本　祈（たけもと　いのり）が入ってきた。

「はい！それでは今からホームルームを始めますよ～。これからの学園生活について、お話ししていきますので、しっかりと聞いてくださいね～！」

そして先生の言葉が終わると同時に、学園全体に始業開始のチャイムが鳴り響いた―。

#1-2

チャイムがなってから数分が経ち、最初に一人ずつ自己紹介をしていった。だいたいはこの自己紹介でそれぞれがどんな性格なのかが分かる。
普通に挨拶するものや言葉少なめなもの、陽気なものにクールなものなど人それぞれである。
匠は軽い感じに、冗談も交えながらの挨拶。純は言葉少なめだが、それでいて優しい感じに…。
勇気は目立つのが少し苦手ということもあり普通に挨拶をした。
全員の自己紹介が終わったあとは、神月学園についてのことや学園の中の施設などが簡単に説明された。
そして今はこのあとの日程についてが話されている。

「え～、それではこれからの日程についてお話しますね。この後は教室をでて研究施設がある、学園内の東区域へと移動します。もう分かっていると思いますが、皆さんが入学したのは特別な学科です。なので普通の学生としての生活もありますが、皆さんだけの特殊な日常を送っていくことにもなりますよ～」

（俺たちだけの特殊な日常…か）

そう、勇気たちが入学した学科は普通の学科とは違う。
この学園には普通科、商業科、工業科、美術家、音楽科などの通常学科の他にユニークな学科（これについては後ほど…）もある。
そして勇気たちが入ったのは相応の覚悟が必要といわれている学科だ。

その学科の名は？特殊技能科（とくしゅぎのうか）？

全世界で必要不可欠な人員である、魔装具（まそうぐ）を操る者たち？デュナミス？を育成する学科だ。
この世界には人の他に？魔物（モンスター）？が生息している。魔物たちの中には人と共存しているものもいれば、人に襲いかかるものもいる。
その襲撃してくる魔物に対して被害を最小限に抑えるために存在しているのがデュナミスだ。
このデュナミスを育成する学園は世界中に点在しており、神月学園もその一つである。
当然ながら魔物と戦うということは自分の命を懸けるということになるので、それ相応の覚悟が必要だ。
だがそれに対しての生活保証などがされるというのもまた事実である。
そのため一人前のデュナミスを目指すために学園に入学する者も少なくない。
そして各地に点在する育成機関の中でも、この神月学園は最新の機器や技術などを備えた学園だ。また学園都市ということもあり学園への入学者は年々増加傾向にある。
勇気たちのクラスは１年Ａ組だ。
他にもＢ組からＪ組までの全１０クラスで構成されており、１クラス４０人編成である。

（まあ特殊技能科に入った以上は普通に学園生活を送れるとは思ってなかったけどな…）

勇気も自分で決心して入学したのだから、これからのことについては少なからず分かっていたつもりだ。そんな風にデュナミスや特殊技能科のことを考えていた時だった。教室に備え付けられている電子黒板のコール音が鳴り響く。

「あら…。特殊技能科全クラスへの通信みたいですね～」

そう言いながら祈は自分の腕につけている通信機を使って再生した。すると画面に白衣姿の女性が映し出された。

『特殊技能科の教職員と生徒の皆さんにお知らせします。適正検査の準備が整いましたので研究棟へとお越しください。繰り返します。適性検査の準備が整いましたので研究棟へとお越しください・・・』

「はいはい、それでは準備が出来たらしいので今から神月学園東区へ移動しますよ～。寄り道などをしないようにしてくださいね～」

どうやら適性検査とやらの準備ができたらしい。勇気が廊下のほうに目をやるとすでに他クラスの生徒たちも移動を始めていた。それを見て勇気の周りのものたちも次々と立ち上がり、各々移動し始める。

「それじゃあ僕たちも行こうか」

伊吹の言葉に勇気もそうだなと言って席を立ち、匠と純も共に集合場所へと向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

勇気たちは広い学園内を移動して東区域へと向かっていた。

「…にしても改めて思うんだが、この学園ってメチャクチャ広いよな～」

学園の中央広場を歩きながら匠がつぶやく。

「まあ広いっていうのは分かってたけど、ここまでバカ広いのには驚かされたわな」

「入試の時には迷子になったしな…」

勇気と純は苦笑いをしながら入学試験の時を思い出す。初めて神月学園に来たときは、あまりの広さに二時間ほど学園内を走り回っていた。他にも入る場所を片っ端から間違えて不審者扱いされてしまったこともある。
勇気と純は単に巻き添えをくらっただけなのだが…。

「ああ、そういえばなんか騒ぎがあったね。あれってもしかして君たちだったのかい？」

伊吹は笑みをこぼしながら三人に聞く。どうやら入試の時の騒動を覚えているようだ。

「いや～、俺の直感でいろいろと渡り歩いたんだけど、試験会場になかなか辿り着けなかったんだよな～。不審者扱いされたときにはどうなることかと思ったわ！ナハハハ！」

「本当に迷惑極まりないヤツだよ、まったく…」

勇気はやれやれといった感じだ。
この入試の時は匠を先導させて行動していたのだが、それが間違いだったといまだに後悔している…。
いつもと同じくらいの範囲であればどうにか匠を止められたと思うのだが、今回の暴走は抑えることができなかった…。
まあ普段から匠のナンパ風景などを見ていて、女の子がとにかく大好き（↑ここ重要）ということは重々承知していたのだが、何せ高等部ということもあり匠にとっては？麗しきお姉さまがいっぱい！

?状態だったのだからテンションが上がらない訳がない。
だけどいくらテンションが上々でもいきなり『この先から俺を呼ぶ声がするぜ！ウヒョー！！』とか奇声をあげて女子更衣室に突っ込むのはいかがなものかと思う…。
そんなことをするから奥義っぽいもので吹き飛ばされてしまうのだ…。
そしてこの行動のせいで匠だけならまだしも勇気と純まで教師たちに追われるハメになってしまった。
当然ながらこの騒ぎを起こしたことで三人が教師に目をつけられてることは言うまでもない…。

「なるほどね。女性陣が騒いでいたのはそういうことだったのか…。納得したよ」

伊吹は笑いながら、目にうっすらと涙を浮かべる。
勇気は深い溜息をついた。

「ん？あそこにいるのは先生たちか？とりあえず今回は道を間違えてなかったみたいだな…」

「お！A組の連中も揃ってるみたいだな～。急ごうぜ！」

どうやら集合場所に着いたようだ。他の組の生徒もそれぞれの場所に集まっている。
勇気たちも急ぎ、A組が集まる場所へと向かった。

◇◆◇◆◇◆◇

研究棟へと集まった生徒たちは、係員の指示のもと建物内へと足を踏み入れた。どうやら研究棟の内部はエリア別に分かれているようだ。

魔装具の開発や研究、実験などが行われているのは第３エリアになる。

「なぁ？魔装具って最初は武器の形をしてないって聞いたんだけど本当なのか？」

「うん。魔装具っていうのは核となるＤ・コア（デュナミス・コア）が装備者の能力などを読み取って武器になるみたいだよ。だから必要のない時は小物や装飾品なんかに形を変えて持ち運びすることも出来るって聞いたことがあるね」

匠の問いに、伊吹は自分の分かる範囲で説明をした。他にもいろいろとあるらしいのだが、それについてはこれからの授業や実践で学んでいくことになるだろう。

「それにしてもこの建物のなかも、かなりの面積なんじゃないか？

俺たちが向かってるのって第3エリアだったよな…。この施設っていくつのエリアに分かれてるんだ？」

「えっと…。全部で4つじゃなかったっけ？確か入口に案内板みたいなのがあったはずだけど…」

「この施設には第1から第4までのエリアがあって、生物に関しては機械技術、他にも医学の分野などの多種多様な研究がなされている。だけどこの研究所で一番力をいれているのが魔装具やデュナミスについてのことよ。あなたたちも特殊技能科の生徒なら、これから何度もお世話になる場所のことぐらい、少しは勉強しておきなさい」

勇気がこの施設について思い出そうとしたとき背後から声がした。ん？と勇気が後ろを振り向くとそこには一人の女子生徒の姿があった。

髪は深い青色のロング…左右を黒いリボンで小さくまとめている。凛としたその佇まいからは高貴な印象を受けた。雰囲気から察するに育ちのいいお嬢様といったところか…。

（な…なんだこの子…。なんか上手く言えないけど…すごく綺麗な子…だな…）

勇気はその女生徒から目を離すことが出来なかった。匠と純も同様に見つめている。だが伊吹だけは違ってなにやら慣れている感じだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9052v/

装撃のデュナミス

2011年11月13日11時42分発行